



「侮ることなかれ、 生命をも左右する動物の鼻血」

ちょっと聞いてよ!

JA西日本くみあい飼料株式会社広島営業所 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

まだ寒さが厳しかった頃のある日、牛舎で鼻から大量に出血している牛に遭遇しました。幸いにも鼻血は短時間で止まり、牛の衰弱もさほどなかったため、止血剤と抗生剤の投与にて経過を観察することになりましたが、このような症状の場合に疑われる病名は「後大静脈血栓症」です。

これは体内外に存在する化膿病巣の細菌が血流によって後大静脈に至り、そこで血栓を形成すると、その血栓は心臓を通過して肺に膿瘍や肺動脈瘤を惹起し、ある時にその動脈瘤が破裂すると、血液が肺から気管内に侵入した結果、口腔と鼻腔から大量の咯血を起し、出血多量と窒息のためショック死することもある恐ろしい疾病です。

一般に動物の鼻血という点、犬・猫馬においては顔面打撲による怪我での鼻出血が大半を占め、これらの『外因性』出血の場合は、生命を脅かすよう



な事態に陥ることはまずありません。しかし牛の場合は、外傷や怪我での鼻出血という例は比較的少ないようで、私自身の経験でも、牛が顔面を強く打って鼻血が止まらない、といった事態は記憶になく、また鼻環を装着する際などもさほど出血は起こりません。

よって牛が大量に鼻出血したとなれば、まずはこの後大静脈血栓症を疑うことになります。

この疾病は牛の教科書にて「治療法は無いため、診断が確定次第に殺処分すること」との記述があるほどに難治性であるため、その発生は乳牛としての『選手生命の終焉』をも覚悟しなければならぬのです。

この『選手生命の終焉』に関して、馬の鼻出血にも当てはまる状況があります。発生は稀ながら、競走馬ではレース途中などに「運動性肺出血」と呼ばれる肺からの出血を起こす事があり、こ

の血が鼻から噴出するのです。馬は鼻呼吸のみで口呼吸ができないため、競走馬が鼻血を起こすと運動能力が著しく減退し、レース出走はまず不可能となり、最悪引退に追い込まれる場合もあるとの事です。

このように一概に鼻血と言っても、『内因性』の場合では循環器や呼吸器系の重要臓器での障害に起因するため、軽く考えてはならず、生産性や運動能力が求められる家畜にとつては、まさに生命を左右する大問題なのです。

鼻血は重篤な病気の前兆を示す場合もあるため、慎重に考慮すべき症状ですが、こと人間の鼻血に関しては奇妙な『迷信』が世間に蔓延っています。

例えば「チヨコレートの食べ過ぎで鼻血」や「性的興奮にて鼻血」等の説があります。しかしこれらに医学的な根拠は無く、単に漫画等で面白おかしい描写として使われたため、その印象が定着したものと思われれます。ただ人間は心理的にドキドキすると血流が活発になり、鼻血が出る事もあり得ることなので、この種の鼻血についてはあらぬ誤解を招かぬようご注意ください。